

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	荒木 敬士
論文担当者	主査 小山 英則
	副査 吉村 紳一
	副査 若林 一郎
学位論文名	Central serous chorioretinopathy with and without steroids: A multicenter survey (中心性漿液性脈絡網膜症とステロイドの関連における多施設後ろ向き観察研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>中心性漿液性脈絡網膜症(central serous chorioretinopathy: CSC)は、網膜の黄斑部に漿液性網膜剥離が生じ、視機能異常を呈する疾患である。発症要因として、心身のストレス、喫煙、ステロイド薬などが示唆されてきたが、日本人における多数例での検討は行なわれていない。荒木氏らの研究は、本邦の多施設でのCSC症例における患者背景や特徴を、特にステロイドとの関連に注目して後向きに調査したものである。</p> <p>対象は、臨床網膜研究会(JCREST)参加施設のCSC症例(2013年4月-2017年6月)で、光干渉断層計、フルオレセイン・インドシアニングリーン蛍光眼底造影が撮影され、3か月以上経過観察された477例 538眼(男性344例、女性133例)である。年齢、性別、等価球面度数、中心窩脈絡膜厚、leakage pointの数と場所、透過性亢進の有無、ステロイドの投与歴、喫煙歴、抗不安薬の内服歴は、後向きに診療録から抽出した。主要評価項目をステロイド関与の割合、副次項目をステロイドの有無による病型の差異とした。</p> <p>74例(15.5%)(男性39例、女性35例)でステロイドが使用されていた。ステロイド使用群では、平均年齢が高く($p=0.0403$)、男性の優位性はみられず、両眼性の割合が有意に高く($p<0.0001$)、喫煙歴は有意に低く($p=0.0345$)、抗不安薬の内服歴は高かった($p=0.0016$)。また、複数の網膜色素上皮剥離を認め($p<0.0001$)、漏出点の数が有意に多く($p<0.0001$)、中心窩脈絡膜が厚かった($p=0.0287$)。等価球面度数、透過性亢進には有意差はなかった。</p> <p>荒木氏の研究成果は、ステロイド投与歴の有無によるCSCの病型特徴の違い、特に脈絡膜肥厚との関連を明らかにしており、PLoS ONE 誌 (IF 2.776)に採択されている。ステロイド投与患者のCSC発症の予防につながるるとともに、ストレスに起因する網膜病変の病態理解にも寄与する本研究の知見は、学位授与に十分値すると判断した。</p>	